

小学校4年道徳の時間

「正しいことは勇気を出して」(1時間)

「ドッジボール」(出典『どうとく4ゆたかな心で』東京書籍)

【旧：勇気1-(3) 新：善悪の判断，自律，自由と責任A-(1)】

授業者 阿保 裕也

実践の概要

この実践は、「ドッジボール」(東京書籍)という資料を用いて、正しいと思ったことは、勇気をもって主張できる大切さや難しさに気付くことができるよう、「問題解決的な学習」,「登場人物への自我関与」の要素を取り入れた取り組みです。

自分事として学習に取り組むことができるよう、学習する道徳的価値に対する課題意識を持たせる工夫、自分の立場や考えを見える化することで、問題解決に向けて子供たちが自主的に協働できるようにしました。

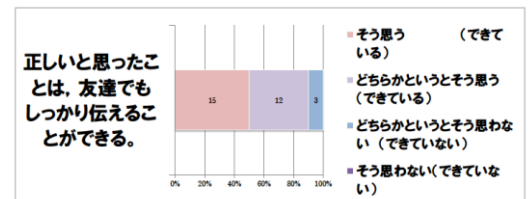
一人一人が道徳的な課題や登場人物の判断と心情について考え、議論し合うことで多面的な考えにふれることができ、問題解決に向けて多角的に考える力を身につけることをねらいとしています。

授業のねらいと展開

この授業のねらいは、これまでの生活を振り返り、登場人物の行動や心情について考えたり、友達の考えを聞いたりすることで、正しいと思ったことは、勇気をもって行うことの難しさや大切さについて気付くとともに、正しいと思うことは、勇気をもって行おうとする態度を育てることです。

日常生活の想起・アンケート結果の把握→課題の把握→課題に迫るための主発問について議論し合う→学習を振り返り、わかったことや日常生活で活かそうなことを交流するという流れで授業が展開します。よりよい生活や自分に近づけるために、自分たちの生活を振り返りながら、多面的・多角的な見方で自分の思いや願いを表現することができる力、正しいと思ったことは、勇気をもって行動することの大切さに気づき、これからの生活に活かそうとする態度をなどの資質・能力を育てていきます。

アンケート結果		「正しいことは、友達でもしっかり伝えることができる。」	「そう思う(できていない)」	「どちらかというそう思う(できている)」	「どちらかというそう思わない(できていない)」	「そう思わない(できていない)」
正しいと思ったことは、友達でもしっかり伝えることができる。		15	12	3	0	



開始期で掲示したアンケート結果のグラフと表

視点1:学びの文脈のある学習を構想する

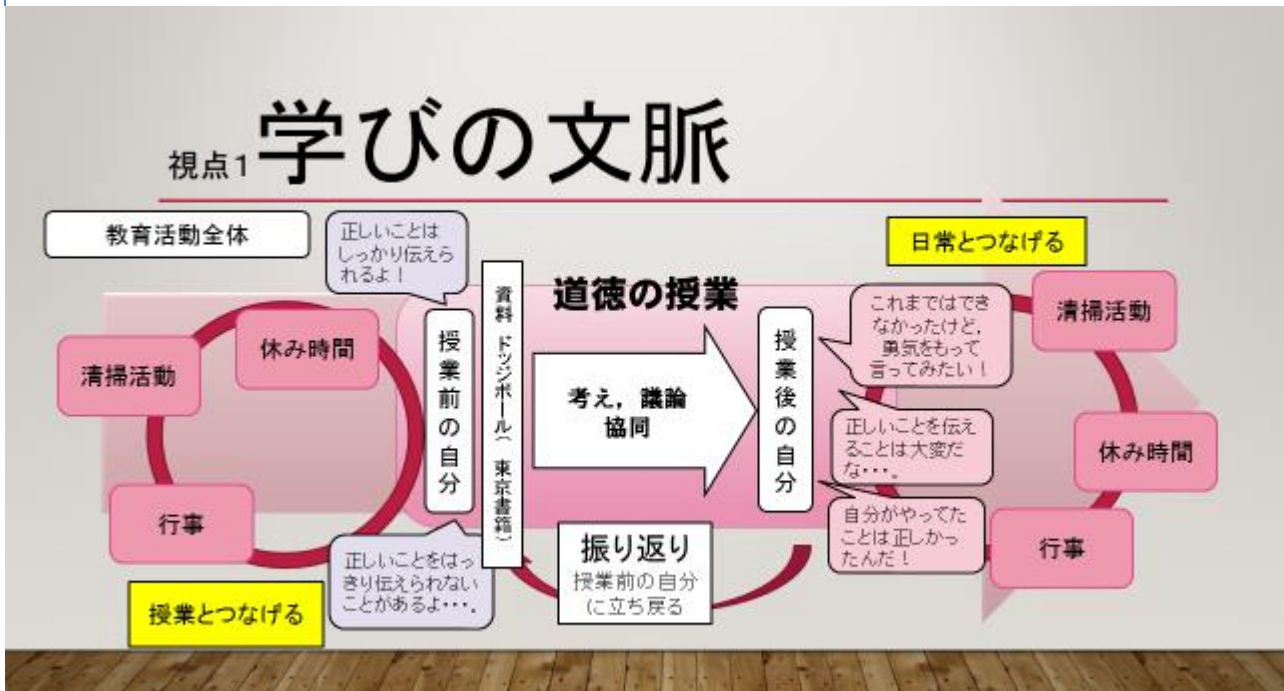


図1 本実践における「学びの文脈」のイメージ

子供が学びの連続性、必要性、関連性を自覚しながら学ぶことができるように学びの文脈のある学習を構想します。

開始期では、日常生活と授業をつなげ、自分の課題として捉えられるよう事前にとってあったアンケート結果（正しいと思ったことは友達でもしっかり言える）を伝えました。また、自分たちの生活の様子を想起させる場面を設定することで、自分の実態を自覚した状態で学習を進めることができます。

展開期では、本時の授業で考えさせたい道徳的価値に迫れるような課題（主発問）を提示します。主発問についての自分の立場を選び、その理由を考え発表し合うことで、多様な考えに触れ、自分の考えと比較したり、結び付けたりします。

まとめ期では、開始期で確認したこれまでの自分に立ち戻り、どんなことがわかったのか、これからの生活にどのように活かしていけるのか交流し合う場面を設定します。これまでの自分と授業後の自分の考え方を比較することで、自らの考え方の変容や強化を意識することができ、次の道徳の学習への意欲や日常生活での道徳的な実践につながっていきます。（図1）

視点2 必要感ある協同的な学び

① 児童同士の主体的な議論を促すために、黒板にネームプレートを貼ることで、発問に対する児童の立場を明確にさせ、理由を考えさせる。

② 発問に対するお互いの立場を明確にすることで、友達の意見を求める状況が生まれ、必要感のある交流を行うことができるようにする。

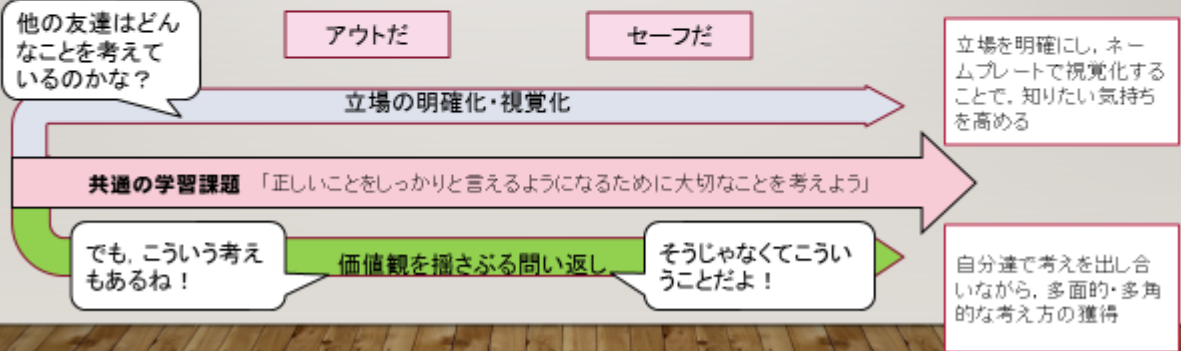


図2 本実践における「必要感のある協同的な学び」のイメージ

まず、共通の学習課題として「正しいことをしっかりとと言えるようになるために大切なことを考えよう」という課題を位置付けます。学級全体での課題が明確になり、学級全体で協同する意識を高めるとともに、学習の見通しをもたせることができます。

主発問「もし、自分が明だったら、一郎君になんと言いますか？」に対して、子供は様々な思いをもちます。大きく分けると「アウトだ」「セーフだ」の2つの立場に分かれます。子供は同じ立場の意見も知りたいたいと考えるでしょうし、違う立場の意見も知りたいたいと考えるはずです。そこで、ネームプレートを黒板に貼らせて、それぞれの立場を視覚的に捉えられるようにしました。2つの立場から課題を解決する方法を考える経験は、多角的なものの見方につながっていきます。

子供が自分の立場を判断する際には、必ず理由があります。例えば、「アウトだ」の立場の児童で、『正しいことは伝えるべき』という善悪の面で捉えることが想定されます。また、『だめなことはだめと伝えてあげないと本人も今後困る』という友情の面で捉える子供もいるでしょう。様々な面からの考え方に触れることは、多面的な考え方につながっていきます。意見を出し合う中で、教師が子供たちの価値観をゆさぶる問い直しをすることで、多面的・多角的な考え方を高めていきます。(図2)

視点3 目的に応じた弾力的な振り返り

・今日の学習を終えて、これからの生活に活かそうなことや思ったことを記入する。①

・友達のよいと思った意見やなるほどと思った意見を発表し合う。②

☆授業の導入で想起した日常生活とを結びつけ、価値観の変容や強化、これからの日常生活における「道徳的实践」につなげていきます。

☆友達と協同する良さや自己肯定感を感じたり、これからの学習に向けての学習意欲や道徳的实践につなげていきます。

図3 本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」のイメージ

授業のまとめ期に2つの振り返りを行います。

1つ目は、今日の学習を終えて、これからの生活に活かそうなことや思ったことを記入します。授業の開始期で想起した日常生活の自分の姿と結び付け、価値観の変容や強化、これからの日常生活における「道徳的实践」につながるようにします。

2つ目は、友達のよいと思った意見やなるほどと思った意見を発表し合います。友達と協同する良さや自己肯定感を感じたり、これからの学習に向けての意欲や道徳的实践につなげたりすることができます。

この2つの振り返りによって授業と日常生活をつなげていきます。（図3）

授業者からのコメント

より自分事として捉えられるように

実践を通して感じたことは、子供が課題を自分事として捉えていることが、話し合いの活発さや真剣さにつながってくるということです。授業の開始期に道徳的な価値を教師がしっかりとつかませ、子供が自分の課題として自覚できるよう支援すると、自分の実生活に引き寄せて考えた発言が多く見られるようになりました。また、振り返りでも自分のこれまでの行動や考え方を内省する様子が多く見られました。

「問題解決的な学習」の要素を取り入れたとしても、その問題自体が子供たちにとって切実感のないものだったり、教師によって切実感を感じられる手立てが十分に講じられていなかったりすると考えが深まらない、正論だけが出されて他人事として終わってしまう授業になってしまいます。そのため、しっかりと児童の実態をおさえ、実態に応じた課題設定や手立てを講じていく必要があると感じました。

今回の授業では、導入でアンケート結果を伝えると、「もっとそう思うを増やしていきたい」「よい学級にしていくためにはまだまだだね」という発言がありました。また、相手に合わせてしまい、本当のことを言えない場面がなかったか交流すると、いくつかの事例が出てきて、「たしかにあるな…」という子供の本音も聞くことができました。本課題を自分ごととして捉える子供の姿が見られました。

道徳の導入の重要な役割は、「自分の問題として捉えさせる、道徳的な価値を意識させる」の二点です。「考え、議論する道徳」を実現し、質の高い道徳の授業を行っていくには、考える時間や議論する時間の確保が必要不可欠です。今後は、道徳の学習の中で考え、議論する時間を確保するために、他教科・領域において問題や道徳的な価値の自覚化をする時間を設けるなど、総合単元的な学習も視野に入れたり、教科・領域間のつながりを意識した指導を行ったりする必要がありそうです。

考えの見える化で協同につなげる

今回の実践では、グループワークを取り入れませんでした。全体の場での意見交流・話し合いを中心にしました。共通の学習課題として「正しいことをしっかりとと言えるようになるために大切なことを考えよう」という課題を設定し、学級全体で向かうゴールをそろえました。その上で、主発問「もし、自分が明だったら、一郎君になんと



ネームプレートや発言を板書に位置付け見える化をする

言いますか？」に対する立場（「アウトだ」「セーフだ」）を選択し、ネームプレートを貼り、その理由を交流しました。発言した子供のネームプレートや発言を板書に位置付けて見える化したことで、子供たち同士の意見の交流が生まれていきます。

他の人の意見を聞いて自分の考えが変わった場合は、立場を変えてよいこととしました。学習の中で「〇さんの意見を聞いて、考えが変わった」という発言がありました。他の人の意見を取り入れて共に学んでいる証拠です。そのため、考えの変容やその変わった理由をととても大切にしています。道徳では、グループワークだけではなく、こういった学びも協同と言えるのではないかと考えます

目指す子供の姿の明確化と問い返し

他教科と同じように道徳の授業においても、目指す子供の姿の明確化が大切だと考えます。今回の授業でいうと、「これまでの生活を振り返り、登場人物の行動や心情について考えたり、友達の考えを聞いたりすることで、正しいと思ったことは、勇気をもって行うことの難しさや大切さについて気付くとともに、正しいと思うことは、勇気をもって行おうとする態度を育てる」というのが、ねらいです。

今回の授業では、正しいと思うことは、勇気をもって行おうとすることの大切さを学ぶと同時に、大変さにも目を向けさせたいという思いがありました。人間の弱さを自覚して欲しいという思いがあると、子供の意見をそのまま聞いて終わりではなく、詳しい理由を聞いたり、正論だけでは説明がつかないところを踏み

込んで聞いたりして子供たちの「それは、…」 「でも、…」 「そうじゃなくて…」 を引き出していきます。その問い返しをきっかけに子供たち同士の話し合いが加速していき、議論につながっていくのではなかと考えます。

目指す子供の姿をしっかりと見据えることで、そこに辿り着くことができるような言葉がけが見えてくるのではないかと考えます。